

書評と紹介

浅海典子著

『女性事務職の キャリア拡大と職場組織』

評者：大槻 奈巳

「女性事務職」という言葉からどのような職務内容、働き方を私たちは思いうかべるのか。著者は、十分な実証研究が行われていないにもかかわらず、女性事務職の仕事は「ルーティン的な事務作業」や「職場の雑事」とみなされ、具体的な事例や職務に関する事実は挙げられることなく、女性事務職の仕事は業種や部署による差異が少なく補助的であるとの見方がなされてきたと指摘する。この問題意識のもと、本書において著者は女性事務職の仕事とキャリアを職場組織の中でとらえ、その内実と変化を明らかにすることを目的とし、男性とともに働く職場組織で事務労働をになう女性たちが誰とどのように仕事を分け合い、何を引き受けているのか、ベテランになるに従い仕事は変わるのか、変わるとすれば背景に何があるのか、女性事務職のキャリアはどこに向かうのか、を明らかにするため女性事務職の仕事そのものに焦点をあて深く立ち入って分析することを試みている。

1 本書の構成

本書は以下のような構成となっている。

第Ⅰ部 営業職場における女性事務職の仕事とキャリア

第1章 営業職場の女性事務職の職務

第2章 平均的な女性事務職と柔軟な職場組織

第3章 ベテラン事務職の能力伸張と職場拡大

第4章 他職務への転換によるキャリア拡大

第5章 IT化の女性事務職への影響

第Ⅱ部 営業職へのキャリア拡大と職場組織の変容

第6章 事務職から営業職へのキャリア拡大とその条件

2 本書の課題

本書では三つの課題、第一に女性事務職は仕事経験を積み重ねることによって能力伸張とキャリア拡大を図っているのか、第二に男女の職務は分断され女性事務職は補助的な役割にすぎないのか、第三に女性事務職の仕事とキャリアおよび性別職務分離はなぜ変容するのかを設定し、職務とキャリアに関する調査とその分析によりこれらの課題に答えをだそうとしている。

著者は、第一の課題については、ある一時点での職務分析にとどまらず事務職として働く女性たちの具体的な仕事、その積み重ねとしてのキャリアの軌跡を追うことで「単純で定型的」とされる女性事務職の職務と能力伸張、キャリアの拡大を実証したいと考え、第二の課題については、「補助的」とされる女性事務職の職場での役割を検証することによって性別職務分離の有無と程度を明らかにできると考えた。第一第二の課題への答えが第Ⅰ部、第Ⅱ部通して女

性事務職の仕事とキャリア、女性事務職の営業職へのキャリア拡大から論じられている。さらに第三の課題については事務労働を大きく変化させていると考えられる情報通信技術の進展に注目して女性事務職の仕事にどのようなインパクトを持つかという問題意識をもちつつ、やはり第Ⅰ部第Ⅱ部を通して論じられている。

3 方法

上記の課題解明のため、著者は情報通信機器メーカーA社の営業職場の女性事務職を対象として、仕事のあり方、キャリア拡大のあり方を検討した。具体的には国内営業職場における男性営業職と女性事務職の分業のあり方を女性事務職へのインタビュー調査、アンケート調査を行い丹念に調べた。さらに、さまざまな企業で営業職に職務転換した女性もしくは営業の仕事の一部的に取り込んでいる女性事務職の女性9社10名を対象に事例研究を行った。

4 知見

本研究の知見として、次の点があげられる。本書の第一の課題、女性事務職は仕事経験を積み重ねることによって能力伸張とキャリア拡大を図っているのかについて、1) 女性事務職の職務は複雑で多様なのか、2) ベテラン事務職は能力伸張しているのかは、3) 職域拡大とキャリア拡大は生じているのかの点から検証がなされた。その結果、第一にA社営業職場の女性事務職の仕事において難易度の差異があること、営業職に転じた女性の事務職時代の職務内容の分析から、5つのタイプの職務を見出し、女性事務職の仕事は定型的ではなく女性事務職の職務は複雑さと多様さを持つものであると著者は指摘している。第二に、ベテラン事務職の場合、困難な交渉や複雑な調整が必要な職務によりかかわる、複雑な物件に関する職務・重要

書類を扱う職務を営業から取り組む、後輩の育成を担うなど、女性事務職は勤続年数の伸張にしたがって知識と技能を向上させているという。第三に、ベテラン事務職へのインタビューからベテラン事務職は主に営業職が担う領域の仕事を取り込み、職域拡大を図っていること、さらにA社女性事務職は学校やストア担当の営業職、テストマーケティングのスタッフ、販売促進スタッフへの職務転換によって女性事務職のキャリア拡大がなされていると指摘する。

本書の第二の課題、男女の職務は分断され女性事務職は補助的な役割にすぎないのかについては、女性事務職と男性営業職は各々が主たる職務領域を持ちながらも相手の職務を取り込み、補い合って両者が高度化を図って仕事を進めており、職場内におけるこのような職務のわけあいが女性事務職の技能向上を促進しキャリア拡大へとつながっているという。

第三の課題、職域拡大とキャリア拡大の要因については、著者は女性事務職個人の要因、企業・上司・職場の要因・市場・顧客と商品の要因、技術的要因、定着を促す施策要因を挙げているが、なかでも企業の事務職活用の方針、上司の積極的な姿勢と支援という組織側の要因の重要性を強調している。

さらに今後の課題と展望として、課題としては環境変化と事務職の将来において特にIT化と非正規雇用者の急増を射程に入れた検討が必要であることをあげ、展望としては幅広い職務内容にこそ女性事務職の能力伸張とキャリア拡大の可能性が存在すると指摘している。

5 本書の貢献と意義

本書の貢献は、特に次のような点が挙げられる。第一に女性事務職に焦点をあてその職務の内容を丹念に分析し、女性事務職と男性営業職の各々が主たる職務領域を持ちながらも相手

の職務を取り込んだり補い合っている状況を明らかにしたことである。この職務のわけあいこそが女性事務職のキャリア拡大へとつながることを明確に示した貢献は大きい。上司が女性事務職の担当職務を狭い範囲に限定せず営業職の職務や新たな課題を女性事務職に与える重要性を指摘したことは、具体的な職場のあり方において変革に導いていく展望を示したことになる。第二に、女性事務職の職務内容を詳細に分析し記したことによって、職務内容の研究において女性事務職の職務を明らかにすること自体においても前進があったといえよう。このことは著者の大きな問題関心であった「ルーティン的な事務作業」や「職場の雑事」と考えられがちな女性事務職への考えを変えるものであろう。

一方で、本書で気になる点も指摘しておきたい。第一に職務分析の方法である。本研究では、営業事務職の職務分析は丹念に行ったが、営業職の仕事の洗い出し調査は行わず、営業事務職へのアンケート調査をもとに営業職の職務、営業職と営業事務の分担を分析している。さらに職務アイテムごとの職務評価を行っていない。そのため、営業職の最も重要な職務は担当顧客をもち受注をとるという位置づけが全編を通して弱いのではないか。さらにどの職務が重要で、どの職務があまり重要でないという視点も弱い。著者は、女性営業事務職は「補助職ではない」と結論し、営業職場で販売活動の一部を担いながら営業職の代行も行う女性事務職はホワイトカラー専門職として認識されつつあるのではと指摘するが、営業の部門において売上をあげることが最も重要とみなされる限り、営業事務職は営業職が売上をあげるにより専念するためにその事務処理を担当する職務と位置づけられ、この意味において営業職の補助的であり、「専門職」として成り立つかは難しいのではないか。第二に、著者は女性事務職が営業職

に職務転換したり、営業の仕事を部分的に取り込んでいる状況をふまえ、性別職務分離が縮小していると論じているが、営業職に転換したとしてもその営業職のなかで担当する職務が男性と女性で異なるとしたら、新たな性別職務分離のはじまりであり、女性事務職が男性営業職と職務のわけあいをおこなっているとしても、主となる職務が異なれば、性別職務分離の程度は軽くなっているが、性別職務分離の構造はあるといえよう。いままでの研究でも男女の職務が全く分断されていると論じたものはあまりなく、男女の職務分担の混ざり方の程度によって類型化したり、混ざり合いの状況を指摘したものは多い。混ざり合っているものの、その状況を性別職務分離と見なしてきたのは、主たる職務が異なっていることをふまえてである。

この点については慎重に論じる必要があると考える。さらに「縮小」を論じる場合は時間経過を踏まえ前の時点での性別職務分離の状況と後の時点の状況を比べることになるが、Ⅱ部の業職に職務転換した女性もしくは営業の仕事を部分的に取り込んでいる女性事務職の事例研究において、前の時点での状況を一律「事務は女性、営業は男性」、職務が全く混ざり合っていないことを前提にしている。本書の大きな知見のひとつは女性事務職と男性営業職は職務のわけあいをしていることなのだから、前の状況を職務が全く混ざり合っていないときめつけず、経過をより分析すれば「縮小」のあり方をより論じることができたと考える。

気になる点を述べたが、女性事務職の仕事そのものに焦点をあて、深く立ち入って分析し、キャリア拡大も射程に論じた労作であろう。(浅海典子著『女性事務職のキャリア拡大と職場組織』日本経済評論社、2006年5月刊、vii+260頁、定価3,800円+税)

(おおつき・なみ 聖心女子大学文学部准教授)